

さや
沙耶のいる透視図

伊達一行



沙耶さやの透視図

伊達一行

沙耶さやのいる透視図

著者 伊達一行

一九八二年十二月二五日 第一刷印刷
一九八三年一月一〇日 第二刷発行

定価 八八〇円

装幀者 司修

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 (〇三) 二三八一 二八四二
販売部 (〇三) 二三八一 二七八一

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

© 1983 IKKO DATE

Printed in Japan 0093—772416—3041

沙^さ耶^やの
いる透視図

第六回すばる文学賞受賞作品 「すばる」一九八二年十二月号掲載

グラスの中の氷を一個つまみ、女の尾骶骨に押しつけた。女は眠りの底から短い不機嫌な呻き声をあげて軀を反るようにくねらせた。溶けた氷が堅くすばめられた尻の溝をつたって、ひとすじ、嘗めるように流れる。女は子供がむずかるような声をあげて僕の手を払いのけると、荒々しくタオルケットを引きあげて軀をつつみ、手脚をまるめた。

僕はシャツに落ちた氷を灰皿に投げ入れた。サイドテーブルの端に空のシーバスの瓶が倒れ、その横に半分程あけたゴードン・ジンがある。起きあがると、足元にペントハウスが落ちている。ヘッドホンをつけたブロードの女が、テープデッキに片脚をあげて股を開いている。金色の細い針金のような毛が薄紅色のスイートピーのまわりに密生している。首に金モールの長いスカーフを巻きつけて、女は薄く開けた唇の間から白い前歯を覗かせ、心なしか侮るような微笑を溶けかけたオブラートのようにうっすらと口元に貼りつかせている。女の瞳は葡萄色に近いダークな青紫色だ。僕は立ったまま右足の指で次のページをめくった。見開き全面に、濡れたようにぬめりと光る果実の断面のような局部が拡大され、オレンジ色のマニキュアを塗った指先で両側から押し開いていた。そして、その下から、ドラキュラ伯爵に扮した男が偽物の牙を剥き出しにして、さらされた果肉に噛みつくようとしている……

カーテンを開けると、外は夕暮れだった。七階の一番端にあるこの部屋のヴェランダは東を向いて突き出し、晴れた日には副都心の高層ビルがよく見えた。いま風景はアルミニウム色の霧にまどわされてぼやけている。ヴェランダのドアを開けると、曇り空から病人の吐息のような風がゆるゆると流れてくる。

春に吹く埃っぽい風には、芽ぶいたばかりの植物の、少しばかり血なまぐさいような息吹きが絡んでいる。吸いあげた息が糸くずのように胸にまとわりついて脹らんだ瞬間、めまいのように時間が錯綜し、記憶の纖毛が揺れる。と、様々な思いの渦があふれてくる。例えば、黒いランドセルの堅固な重さ、着心地悪い制服、その左胸にぶらさがった名札が強いる痛いような緊張。四月。雨曇り。丘の上の古びた木造校舎につづく坂道を真新しいズックで登って行ったときの、たった六歳の心細さ。二年後、その坂の途中で倒れ、救急車で運ばれて行った隣の少年は、翌年の春、あっけなく死んだ。白血病という病気だと知ってから、埃っぽい春の風が舞う坂の途中には、いつも少年の姿をした白血病が青白い顔をしてうずくまっていた。

片脚の不自由な英語教師に思いを寄せている少女と、はじめて裸の軀を重ねたとき、クリトリスを舐めるように強要された。白濁した春の光が澱んだ午後、開かれた少女の太腿の間にも、長患いの病人の吐息があった。唇を寄せると、後ろめたいたじろぎに食い込んできた嫌悪には、ひやりとした侮蔑が混っていた。僕は眼を閉じ、心を閉じて、舌を伸ばした。少女の股の間から顔を離すと、僕はいやしさにぬかるんだ口をシートに押しつけ、少女に気づかれぬようにそっと唾を

吐き出した。

——タオルケットをずらし、女の物思わしげに弛緩した水蜜桃色の乳首を口に含んだ。女の名前はマコという。マコは煩わしそうにゆっくり首を振り、僕の頭を右手で押さえたが、掌に力がかもらない。堅くなった乳首を戯れに舌尖でころがすうちに、僕の軀の芯で波立ち、ざわめくものが感じられた。マコの肩にまわした手を背中の窪みにすべらせる。皮膚の内側で何か熱いものが少しづつ溶け崩れるように蠢きはじめ、それを一つひとつ指の腹で丹念に探るうちに、マコが軀をくねらせて応えてきた。

乳首から唇を離し、骨盤線を下に辿って腿の奥に手を差し入れた。ひっそりとしていた陰毛が、急に猛々しく見える。うっすら汗ばんだ首に唇を這わせながら、指先で湿った肉の髪をえぐる。中指だけが膿んだように熱い。その爪の間から、遠い夜の記憶が蘇る。——十歳の夏の夜のことだ。僕は窓辺に座って、母を待っていた。その日、母はおやつに桃を二個、僕に与えて仕事に出かけた。二階のその窓から、夜の海が見えた。

父と別れた母は日本海に面した北の港町で小料理屋をはじめた。僕はいつ頃からか、深夜に眼を醒まして、母の帰宅を待つようになっていた。母の足音が路地の角から聞こえると、急いで蒲団にもぐり込み、母の帰りを確かめてから眠りに戻った。ときに、母はいくら待っても帰らない

ように思うことがあった。真夜中のきわだった沈黙の中で、時間が粘液のように軀をつつみ、僕は夜の闇に紛れ込んで身動きできなくなった。幾度か母の帰宅が朝になることがあった。そんな夜、僕の眠りは浅かった。

僕は両手で桃をもてあそびながら黒い海を見ていた。暑熱に脹らんだ夏の空気は、岩に碎ける波の音の角を削り、やんわり単調な響きとなって耳を打つ。その潮騒の隙間をぬって、静寂が細い透明な電波のように夜の海の極みから僕の頭の空洞を充たした。頭の中にもう一つの暗い海があるようだった。

どのくらい経ったのだろう、不意に足音と話し声が聞こえた。僕はカーテンの陰に隠れて路地を見おろした。街灯の貧しい光の輪の隅に、母と見知らぬ男の姿が浮かびあがり、すぐに石塀の闇に消えた。母の肩にまわした男の指が四本しかないように思われた。中指がない。僕は眼をこらした。母と男は枯れた松の木の横で抱き合い、男の腕の中で母は身を縋るように軀を動かしていた。そのうち、二人は砂利道をゆっくり踏みつけながら家の中に入って来た。僕は桃を胸に抱えたまま蒲団にもぐり込み、階下の物音に耳を澄ました。耳の奥で血の流れる音がした。ドク、ドク、と鼓動する音は、時間が雲となってしたたる音のように思われた。

少しして、母の粘つく糸を引く声がかすかに漏れ聞こえてきた。僕は起きあがって階段から下をうかがった。うねくった声が明瞭になるにしたがって、軀が小刻みに震えた。男の四本しか指のない手がいやらしいほどはつきり思い浮かべられた。どうしたわけか、ないはずの中指だけ

が蛇のように動いている。知らず知らずのうちに、僕は桃をもった手に力をこめていた。水のように冷たく澄んだ憎悪が、細い指を通してやわらかい果肉に刺し込まれた。ぬるぬるした感触が指の先端を蝕み、爪の間に果肉が食い込んでくる。頭の空洞のもう一つの海が煮えたぎったように揺れている。気がつくとき、僕は桃をぐしゃぐしゃにしていた。粘つく手をもてあましながら立ちつくしているうちに、しつこい徒労感が、僕を夏の明け方の闇のような、さらさらした放心に突き落とした。

母は様々な男を家に引き入れ、軀を売った。僕は無口になり、次第に母の帰りを待たなくなつた。――それだけのことだが、指先が女の肉の裂け目をなぞりはじめると、僕は桃を潰してしまつたときのような気持になることがある。

「……痛いっ」

マコが腰を引いた。僕は果汁にまみれた指を宙に浮かした。指が熱をもった傷口のように重い。

白木のドレッサーに向つて、マコはブラシで髪を梳いている。枝毛の少ない細い髪だ。それを肩まで伸ばして段違いにカットし、真ん中から波打つように分けている。マコの軀は手脚が長く、肩や腹の線もすっきりしていたが、乳房だけは細い胸郭に不釣り合いなほど発達していた。

「あたし、実用的なのよ」

とマコが誇らしげに言ったことがある。肌の色は浅黒いが張りのある皮膚で、肌理きりが細かく滑らかだ。

髪を頭の上でまるめてバスキャップをかぶると、マコの顔はひどくあやういあどけなさが漂うようになる。

「——ねえ」

鏡の中のマコが困ったような物憂い表情を浮かべる。「ビリー・ジョエルの奥さんの名前、知ってる？」

「知らないな。それがどうかしたのか」

「確か、エリザベスだったと思うけど……」

記憶を探るとりとめもない顔で小首を傾げ、

「あの人、ビリー・ジョエルより一つ年上なのよね」

と考え込むように呟きながら、マコは背筋を伸ばしてバスルームに歩いて行く。

焦茶色の革のカメラバッグからシェーバーを取り出し、髭を剃っていると、シャワーの音がした。昨日はマコにつき合って六本木で朝方まで遊び、帰ってからまた飲んだ。息が臭いし口の中が粘つく。洗面所で歯を磨くと、豚毛の歯ブラシに血が滲んでいた。冷たい水で顔を洗い、アフターシェーブ・ローションを叩きつける。ロッキング・チェアーに軀を沈めて煙草に火をつけた。折りたたみ式のデスクの上にスマイレ色の花瓶がある。枯れたバラが古代の首の長い鳥のように

うなだれている。三日前の真夜中、しんと冴えた耳が隣の部屋の絨毯に何かがポトツと落ちる不気味な音を聞いた。バラの花弁が散った音だと、すぐわかった。暗闇の中で鉛のような花びらが、ぶこつなほど鈍重に散るさまを、僕はありありと見たような気がした。

「クリーニングしたバスタオル、もうないでしょう」

マコがバスルームのドアを開けて訊いた。

「どうかな——」

「じゃあ、シートでいいわ」

僕は花模様のシートを引き剥がすと、二つに折ってマコの軀をつつんだ。浅黒い肌が内側から光をあてたように淡く燃えたっている。彼女はローブのようにシートをまとい、ベッドの端に腰を下ろして爪を手入れしはじめた。スポンジ入りの紙ヤスリで爪の表面を丁寧^やに磨く。

「おじさんね、直腸炎になったんだって。急に出血があつて、癌だと思つたそうよ。腸の検査つてバリウムやカメラを肛門から入れるんだって。嫌^やねえ」

紫色のガラスの小瓶に入つた液体を甘皮に塗り、プッシュャーで丹念に押しながら、マコは平淡な声で言つた。そして、訝しそうに顔をあげると、

「でも、腸に入れるカメラってどういうの？」と訊いた。

「ファイバースコープとかいうやつだろう。よくわからないな——」

「カメラだったら、あなたの専門じゃない」

マコにそう言われて僕は苦笑した。カメラマンに医学のことまでわかるわけがない。

「おじさんが痛だったらどうする」

「あたし困るわよ。新しいおじさん探さなきゃいけないじゃない。カッターイワ」

バッファアの鹿皮の面に磨き粉をつけて爪の艶出しをしながら、マコはにやにや笑う。じつと脂が浮いたような笑い方だ。彼女は大阪の貿易会社の専務から、毎月金をもらっている。彼は月に五日だけ東京の支社に出張して来て、マコを抱く。彼女は四十二歳のその男を、おじさんと呼んでいた。毎月どのくらいの金をもらっているのか、僕は知らないが、マコの言葉をかきと、「毎日マキシム・ド・パリに行けば、昼食はインスタント・ラーメンにしなければならぬ」程度の金額らしい。

「りっぱなもんだな」と嫌味を言ったことがある。

「ずっとこんな生活がつづけられたらね」

マコは図太く鼻先で笑った。彼女は昼間、英会話の学校に通い、夜はディスコで遊んでいる。僕と知り合う前から、マコはそういう生活を選んでいて。

今年の一月の終り頃、行きつけの青山のスナックで開店五周年記念のパーティーがあった。その席でマコに会った。黒テンのハーフコートを着た彼女は二十歳にしては子供っぽい顔立ちをしていたが、すんなり伸びた脚や腰は女くさい魅力をもっていた。欲望に見合った女を見かけるのは、それほど難しいことではない。男と女は、そういうふうにできているものらしい。

「帰るの？」

カメラバッグを肩にかけて立ちあがると、あくびをしながらマコが訊いた。

「明日撮影が入ってるんだ。これから事務所に行って打ち合わせだ」

「ごくろうさんね」とマコは怠そうに言った。

「おじさん、きつと癌だよ」

振り向いて、僕はからかうように言った。マコは肩をすくめて唇をゆがめて見せた。

地下の駐車場に降りると、僕は唾を吐き捨てた。仕事に出かけるとき、僕はいつも唾を吐きたくなる。とても嫌な癖だと思う。が、なにかじわりと胸を焼かれたような思いにせかされて、ほとんど強迫的にそうしてしまう。外は四月の夜だった。春の闇は花粉のようにふわふわしている。車をオフィスのある池袋に向ける。

毎日、きわめつけ消化の悪いものを腹に押し込んでいるような気分だった。腹をすかして街に出る。まずいものばかり漁^{あさ}っているつもりはないのだが、口に入れたとたんに苦い後悔の味がする。一日が砕いた石ころのように腹に詰まっている。そいつを抱えて眠る夜には、いつも石ころの夢しか見ない。毎日がそのリターン・マッチだ。ゴングの音はいつまで経っても聞こえてこない。ひよっとすると、シャドー・ボクシングかもしれない。脚にガタがくる年でもないが、フツ

トワークは良好とは言えない。

プロジェクトAはサブマリン出版の子会社で、モデルクラブと写真部を兼ねている。サブマリン出版は自動販売機に入れる雑誌を専門に作っている。コインを入れると両脚を大きく広げた少女がにっこり笑って出て来る、いわゆる自販機本の最大手だ。時代が人間の欲望をそういう形にした。機械にコインが吸い取られる。気に入った少女の番号のボタンを押す。幻の少女がガサリと嘲弄的な音をたてて落ちて来る……

僕は写真部のチーフで、編集部から依頼された写真をフリーのカメラマンに発注する。三日に一度の割で自分もシャッターを切る。写真のテクニクとモデルの女の扱いにかけては誰にも負けない自信があつた。もつとも、そのどちらも写真のよしあしとは無関係だ。

かつて幼児教育雑誌の専属カメラマンをやっていたことがある。毎日、幼稚園に出かけて園児たちを撮っていたが、あがつた写真にはいつも不満が残った。子供の表情が生きていないのだ。

原因は子供と同じ眼の高さで撮らないことであつた。高いアングルは子供に威圧感を与えてしまい、視線が不自然になる。たつたそれだけのことがわかるのに一カ月あまりかかった。どんなに技術的に高度であろうと、母親が愛情をこめて自分の子供を撮った、ただ一枚のピンボケ写真に負けてしまう。僕が子供たちから学んだのはそういうことだった。

オフィスは池袋の繁華街にある。新しい五階建ての黒いビルで、一階が倉庫と駐車場、二階がプロジェクトAとスタジオ、三階がサブマリン出版、四階が営業部と流通部門を引き受けている